

1 学校の概要

(1) 学校規模

ア 学級数：5学級 イ 児童数：40名 ウ 教職員数：9名

(2) 体験活動の観点から見た学校環境

ア 地理的な環境

本校は、海岸線に沿った細長い大畠町の中心にあり、教室の窓から見える大畠の瀬戸は、日本三大潮流の一つに数えられ、釣りの名所となっている。また、学校周辺の山間部では町の特産品の一つであるみかんが作られるなど、海と山に囲まれ、自然に恵まれた環境にある。

イ 施設、関連団体等の環境

福祉やボランティアへの関心を高め、高齢者や障害のある方への理解を深めながら交流することができる特別養護老人ホームや新鮮な海の幸、山の幸などの特産品が販売されるふるさと市場、ふれあいビーチ、運動公園など活動の対象となりうる施設が近隣にある。また、老人クラブ、婦人会、青年団などの組織も多数あり、連携しているいろいろな行事や活動が行われている。

地域には学習の素材となりうる、施設や人材、組織がたくさんある。

ウ 本校の子どもの実態

豊かな自然の中で育ち、素朴で素直である。また、異学年とふれあう機会が多く、互いに思いやりと信頼感をもって接しているが、独創性の発揮や切磋琢磨する意欲などの面に課題がある。

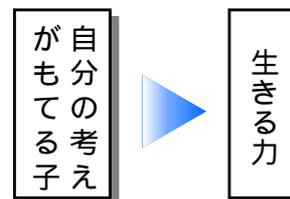
2 活動に関する学校の全体計画

(1) 研究主題

生きる力を育む授業の創造
～ 体験的な活動を取り入れた学習指導の展開～

(2) めざす子ども像

- ア 問題解決能力（自分の問題を解決していこうとする子）
- イ コミュニケーション力（人と関わりをもとうとする子）
- ウ 表現力（自分の思いを工夫して表現する子）
- エ 自己評価力（自分を振り返り、次に生かそうとする子）



(3) 活動に当たって特に重点を置きたいこと

- ア 周辺地域での体験活動から、徐々に自分たちの住む地域に目を向けさせ、その利点やこれからの課題について前向きに考えていくよう実施したい。
- イ 子どもたちを地域全体で育てていくために、地域住民が積極的に児童の教育活動の担い手となるよう、その連携・意識付けに配慮したい。
- ウ 一過性の体験活動とならぬよう、教科や特別活動、総合的な学習等のねらいに即した内容であることに十分留意したい。

(4) 体験活動の種類

一つのジャンルに絞らず、偏りのないように、様々な内容の体験活動をさせていくことが

重要と考えた。

- ア ボランティアなど社会奉仕に関わる体験活動
 - ・老人ホーム訪問によるお年寄りとの交流体験活動
- イ 自然に関わる体験活動
 - ・ビーチでの海水浴や魚釣り、地引網、海砂を使った造形、テングサを採集しての寒天ゼリーづくり、天体観測、ダイビング、シュノーケリングなどの体験活動
- ウ 勤労生産に関わる体験活動
 - ・みかん栽培や農園でのみかんの収穫、みかんジャムづくりなどの体験活動
 - ・豆腐、みそ、蒲鉾づくりを通して日本の食文化にふれる体験活動
- エ 文化や芸術に関わる体験活動
 - ・日本の文化にふれる体験活動
- オ 交流に関わる体験活動
 - ・他校児童との宿泊交流による野外炊事や陶器づくりなどの体験活動
 - ・スポーツを通しての三世代交流体験活動

3 推進体制

(1) 学校としての推進体制

推進委員会(校長・教頭・教務主任・研修主任)を中心に、全校体制で臨む。

(2) 学校支援委員会

ア 学校支援委員会の構成

子ども会育成連絡協議会長、駐在所巡查長、婦人会長、民生児童委員、PTA会長
老人クラブ会長、漁業協同組合長、みかん栽培農家

イ 学校支援委員会の主な計画、特に検討する必要がある課題等

- ・授業内容の理解と協力依頼
- ・地域の特色を生かした体験活動の開発(体験の場や機会の設定)
- ・地域の人材バンク結成(ネットワークづくり)
- ・学校と地域・家庭の三者一体の連携の在り方

(3) 地域推進協議会

ア 委員の構成：推進校6校の校長及び担当者、町保健福祉関係課長、産業関係課長

イ 協議内容：推進校の取組みの現状と課題

推進地域全体として、連携した活動の在り方

4 活動の概要

(1) 3つの視点からの体験活動の教材づくり

以下の3つの視点をもちながら、総合的な学習の時間に限らず、各教科や道徳、特別活動などすべての教育活動の中で取り組んでいくこととし、それぞれの学年で活動を位置付け、体験活動の年間計画を立てた。

ア 地域の素材を生かした体験活動

- ・大畠の海・山・植物などの自然からの学びができるもの
- ・地域の文化や歴史、伝統、産業、過去、未来にかかわる人々の営みの努力や成果といった社会からの学びができるもの
- ・地域の人、老人とのふれあいなど人からの学びができるもの

イ 現在の社会的な課題を追求していく体験活動

- ・環境、福祉、健康、国際理解など

ウ 児童の興味・関心に基づく課題を解決していける体験活動

(2) 特別活動（児童会活動）における体験活動の実践例

ア 海で遊ぼう集会（自然体験活動）

3年生以上で組織する代表委員会で内容を話し合い、児童が計画・準備して7月に全校集会として実施した。大島の海を学習の場にした自然体験活動である。自分たちで計画、運営していくことが自信となり、次の活動への意欲が高まった。当日は、ふれあいビーチで砂運びりレー、宝探し、砂の展示会などを実施した。中でも砂の展示会では、子どもたちのユニークな発想に驚いた。つくりたいものを各班で話し合い、流木や、貝や海草など海岸にあるものをうまく利用してつくっていた。イルカやタコ、中には亀が卵を産むところをつくっている班もあった。感性を生かして自然を満喫した子どもたちであった。



イ 大島苑で遊ぼう集会（ボランティア活動体験）

特別養護老人ホーム大島苑のデイサービスの日に全校で訪問した。各学年が歌や合奏を披露したり、お年寄りと一緒に風船送りゲームを楽しんだりした。また、ふれあいタイムでは、何をしたいか一人一人が事前に考えてきたことを、お年寄りと一緒にに行った。肩もみや手遊び歌、あやとり、大島の昔の話を聞くことなど、それぞれがお年寄りのことを考えて楽しくふれあっていた。



お年寄りと肌で触れ合い、お話をしながらお年寄りとの接し方を知り、思いやりとはどういうことなのかを考えながら活動できた。学校の授業だけでは学べないものを体験を通して学ぶことができたようである。集会後、一人一人がお年寄りに手紙を書いて届けた。

(3) 学校行事における体験活動の実践例

ア 大漁だ！力を合わせて引き上げよう（自然体験活動）

保護者にも呼びかけて10月に実施した。地引き網は初めてという子がほとんどであった。親子のふれあいもできた。また、お母さん方にとっては、魚のさばき方青空講習会にもなったようである。子ども同士、親子だけでなく、親同士のコミュニケーションも図れた。



事前指導として、子どもたちに地引き網でとれると思う魚を予想させて絵に表したり、高学年はその魚を調べたりした。また、全校児童の描いた魚を展示して鑑賞したり、当日も、とれた魚のスケッチをしたりするなど、学習にも結びつけた。

イ みかんの収穫をしよう（勤労生産、自然活動体験）

大島町の特産品のひとつであるみかんの収穫を11月に体験した。ただ実を取るだけでなく、お互いのみかんを傷つけないようにするために、もう一度、枝のついている部分をていねいに切り取る作業もしなければならない。児童の感想に「お世話をするのが大変だろうなあ」「わたしにはできないとか」などとあったように、みかんづくりの大変さに気が付いたのも体験の成果ではないかと思う。自分の目で農園の広さやみかんの多さを見て、体で感じ取った感想である。後日、収穫したみかんをみかんジャムにした。自分たちの町で作られ、自分たちで収穫したみかんを使って、格別のジャムができあがった。



5 研究の成果と今後の取組みの方向

(1) 研究の成果

ア 家庭や地域との連携

体験活動を進めていく上で学校と家庭や地域社会との連携は不可欠であり、学年通信や学校広報や町の広報などに体験活動の趣旨や体験活動での児童の感想などの情報を掲載した。その結果、体験活動では保護者の理解と支援を得るとともに、多数の参加協力をいただき、地域の中で共に子どもを育てていこうとする意識が高まった。

地域や関係機関との連携を図り、様々な専門家に来校していただいたり、こちらから赴いて指導を受けたりするなど協力を得ることができた。これにより地域人材バンクのベースをつくることができた。

イ 子どもの変容

目の前にある自然に体全体で働きかけることによって生まれてくる感動や発見、自然の美しさや新たな疑問は、次の活動への意欲に結びついている。また、活動によって視野が広がり、自然を思いやる心や大切さを感じ取ることができるとともに、地域のすばらしさを実感し、地域を愛する気持ちを育むことができた。

異年齢集団である縦割り班活動を通して、お互いを認め合い、助け合い、協力しながら活動する姿が見られるようになってきた。

様々な体験活動や表現活動の中で、試行錯誤や失敗を繰り返しながら、より望ましい自己選択・自己決定をしていく力や課題を自分なりの方法で追求していく力も少しずつ高まってきた。

「貴重な体験をした。」「やっと完成してうれしかった。」「もう一度やりたい。」「みかんの木を育てるのは大変だ。」など、活動する中で児童の心の変容が見られた。

ウ 教職員の変容

知識を教え込むタイプの授業から体験を学習に取り入れ、自ら課題をもって取り組む授業へ

地域素材を生かした教材の開発の工夫

一人一人の子どもへの多様な見方

(2) 今後の取組みの方向

ア 事前、事後の学習と一体となった発展的な活動の工夫

イ 保護者や地域と一体となった活動の開発

ウ 地域の特色を生かした体験活動の工夫

エ 保護者や地域への情報発信と体験活動の必要性や役割の理解

オ 各教科等の関連を図り、継続可能な年間計画の作成

カ 各体験活動における児童の反応と活動に対する評価及び成果の分析（記録）

キ 地域の指導者と協力体制づくりや社会教育施設との連携強化

ク 他校との年間を通した交流計画の作成

6 まとめ

家庭や地域の協力をしっかり得て、様々な体験活動を実施することで子どもたちの学習の場が広がり、地域全体が教室になった感じがした。また、子どもたちが地域を見直すよききっかけとなるとともに、教師にとっても学習方法や学習内容を見直すことで、特色ある学校づくりを進めるきっかけとなった。

地域の中には子どもたちの学びの素材や人材がたくさんあるということを改めて感じた。さらに、それらを生かした地域での体験活動を進めていくことが、ある意味、地域を活性化していくことへとつながっていくのではないだろうか。